



たくさんさんのモッテコイに感動

薬学部2年 村田蔵維 さん

長崎を代表する伝統の祭り「長崎くんち」。山口県出身の村田蔵維さん(薬学部2年)は、5歳の頃に初めて見て以来、毎年見物に訪れるほど熱心な長崎くんちファンでした。そして昨年、長崎くんちへの憧れもあって長崎大学に進学。本学入学を機に、かねてからの夢だった長崎くんちへの出演をついに実現させました。稽古開始から本番までの間に地域の皆さんと交流を重ねる中で、どのような方言や文化にふれたのでしょうか。

——村田さんが出演した新大工町の奉納踊り「曳壇尻」は、どのような演し物ですか。



村田蔵維さん

村田さん 根曳と呼ばれる20人の曳き手が、重さ3トンから5トンといわれる壇尻を、前進させたり後退させたり回転させたりする勇壮な演し物です。私は、壇尻を回転させる時などに「軸」となるポジションを担当しました。先輩から「一番難しいポジションやけん、車輪に足ばひかれん」と言われて、最初は語尾に「ば」がつく長崎方言に困惑しました。何を言われているのかわからず聞き返すと、先輩はきょとんとするのです。「どこが分かんや」と言われた時には、怒られたと勘違いしました。九州の方言がそうなのかもしれませんが、長崎方言は語尾が強い印象ですね。——長崎くんちに参加している方の多くは、地元で生まれ育った生粋の長崎人ですからね。

村田さん はい。特に指導くださった方々が話す長崎方言は、他の人が話す方言よりも難しかったかもしれません。しかし、時間が経つにつれて、言い回しやイントネーションの感覚をつかめてきました。

——「モッテコイ」「ショモヤレ」「フトウマワレ」など、長崎くんち特有の言葉もあります。前の二つはアンコールを意味する言葉ですね。

村田さん すべて命令形なのが興味深いです。「フトウマワレ」は、「大きく回れ」という意味で使いま

すが、「大きく」を「太く」と言うのは長崎だけでしょうか？ それとも九州全体？ それに「ふとか」「すごか」「よか」など、「か」が多用されるのも不思議です。——確かにそうですね。命令形なのは、観客から演者に呼びかける言葉だからかもしれませんね。

村田さん 「か」が付く方言といえ、[よかよか]の使い方も難しかったです。「部屋に入っていいですか?」と尋ねた時に「よかよか」は入ってもいいという意味だと理解できますが、「これいりますか?」と尋ねた時に「よかよか」と返されると、いるのかわからないのかわからず、理解するのが難しかったです。また、良い演技ができた時には、観客席から「よかぞ!」と声が掛かります。——「いい演技だったぞ」と称賛を意味する言葉ですよ。

村田さん そうですね。同じように「ヨイヤー」という言葉も使われますが、一説には「ヨイヤー」は、長崎のハタ揚げ\*1で相手の糸を切った時に使われる言葉だそうです。「良いことなり」から派生した言葉で、時代が進むにつれて、近年では、長崎くんちでも使われるようになったそうですよ。年配の方の中には「ヨイヤー」ではなく、「よかぞ」を使う人が多いのも、もともと長崎くんちで使われていなかったからでしょうか。

村田さん 鳥肌が立つほど感動しました。大勢の観客から、「きばれよ(頑張れよ)」「新大工頑張らんね」「いぞぞ、待とったぞ」と歓声が飛んできた時は嬉しかったです。長崎くんち最終日の諏訪神社の演技が終わった時には、より盛大なヨイヤーとモッテコイが聞こえてきて、素晴らしい経験になりましたね。



——本番でモッテコイやヨイヤーが聞こえてきた時には、どんな気持ちになりましたか。



長崎の氏神である諏訪神社の秋季大祭「長崎くんち」。演し物を奉納する踊町は7年に一度の持ち回り制です。新大工町は曳壇尻と詩舞を奉納します。村田さん(写真中央)。

ヨイヤー

ヨイヤー

モッテコイ



村田さん はい。長崎くんちが終わった後に打ち上げが行われますが、新大工町では打ち上げのことを「鍋洗い」と言うんですよ。昔は小屋入り\*2をしたら、一つ的小屋に寝泊まりしながら稽古をしていたそうです。稽古中に使った鍋を洗い、それですべての行事が終わるという由来があるようです。この呼び方は、踊町\*3によって変わります。——ほかに印象に残った長崎弁がありますか。

村田さん 壇尻から子どもを降ろす時に肩車をすることがあります。長崎ではこの肩車のことを「ズッキャンキャン」と言うそうです。——県の伝統工芸「古賀人形」をご存じですか。サルの親子が肩車をしている人形のことも「ズッキャンキャン」と呼ぶんですよ。

村田さん それは可愛いですね。——ほかに印象に残った長崎弁がありますか。

村田さん はい。地域での取り組みを通じて、長崎の方言や伝統文化により深くふれることができました。県外出身の友人の誰よりも、長崎人になれたのかなと思っています。

\*1/ハタ揚げ 長崎では「風」を「ハタ」と呼ぶ。  
\*2/小屋入り 踊町の世話役や出演者が、6月1日に諏訪/八坂の両神社神前で清祓(きよはらい)を受けて、大役の無事を祈願する。この日から演し物の稽古に入る。  
\*3/踊町 長崎くんちにおいて奉納踊りを担当する町のこと。

長崎の方言と長崎くんち

解説

方言研究を通して人や文化の動きが見えてくる

方言とは、中央(京都)から水の波紋のように周りに伝わって残存した言葉とされています。元々は平安時代や室町時代の古語だったものが多く、17世紀初頭に出版されたキリシタン版の『日本大文典』\*4や『日葡辞書』\*5に、すでに方言として載っているものも少なくありません。そもそも明治政府が東京の山手の言葉を中心とした標準語を定めるまで、日本の話し言葉は方言しかありませんでした。標準語が教科書で教わる整理された日本語であるのに対して、方言は平安時代から変化を続けてきた自然言語なのです。方言研究には語彙や文法など、さまざまなアプローチの方法がありますが、自然言語である方言の広がりや変化の遷移、消滅に至るまでの動きなどを調べると、その背景にある人や文化の動きが見えてきます。そういった点が、標準語にはない研究の面白さだと思います。



前田桂子 教育学部 教授

オランダ商館長のヘンドリック・ドーフが編纂した蘭和辞典『ドーフハルマ』に関する共同研究など、さまざまな角度から長崎の方言を研究。長崎の歴史や文化に関する課題解決を学術面でサポートする、分野横断型の長崎大学の研究グループ「地域文化研究会」にも在籍。



戦後、方言は悪い言葉だとされていた時代に小学校で使われていた「方言矯正カード」。

一方、戦後の行き過ぎた標準語教育やテレビなどの出現によって、方言を話せない子どもたちが増えました。消えるのは仕方ありませんが、消え方が激しいと思います。方言の衰退は、地域の歴史・文化の衰退につながるでしょう。方言がなくなる未来を想像すると寂しいですね。研究や教育を行うと同時に、例えば方言を使った商品を開発するなど、経済効果に役立つような取り組みが進むと普及につながるのかもしれない。

\*4/日本大文典 修道士ジョアン・ロドリゲスが著したキリシタン版の文法書。 \*5/日葡辞書 17世紀初頭に編纂された日本語とポルトガル語の辞書。

足ばひかれんぞとせんば

最初の「ば」は、古文でもおなじみの「をば」からきています。「竹取物語」の冒頭の「名をば誰岐の造(みやつこ)となむいひける」を古文の授業で学んだかもしません。語尾の「ば」は「せんば」という形で使われていますが、分解すると動詞「す」の未然形「せ」、打消の助動詞「ず」の已然形「ね」に接続助詞「ば」がつくことで確定条件を示します。「せんば」が「せんば」と音便化した例ですね。どちらも長崎で生まれたのではなく、古典がルーツになっています。

よすふとかごとかか

形容詞が「か」で終わるのは、九州の西南部(肥筑方言・薩隅方言)の特徴です。中世末期の長崎でジョアン・ロドリゲスが著したキリシタン版の文法書『日本大文典』には、Amaca(甘か)、Xigueca(繁か)、Ataraxica(新しか)、Yoca(良か)、Curoca(黒か)などが挙がっています。すでにこの頃から方言として認識されていたことが分かりますが、元は中央語のかり活用(良かり、繁かり)からきたものといわれます。古語としては「シ」で終わる、「良し」が一般的ですが、そのほかに「良かり」という形があります。中世になると「良かる」と、ウ段で終わるようになります。これが省略されて「良か」ができたと考えられます。

ふとい=大きい

『日本国語大辞典』(小学館)の用例を見ると、中世の中央語に例があります。『日本方言大辞典』(小学館)では、新潟県、長野県以西に広く分布していることから、中央語の残存と見ることができます。また、「細い(ほそい)」を「小さい」の意味として使う地域もあります。例えば出雲では、小さい皿のことを「ほせせら」と言います。

郷土史家の古賀十二郎によると、「いよいよ華やか」を意味する「彌華」という中国語が語源ですが、そのまま読めば「ミーホー」となるところを、訓読みの「よい」を混ぜて「ヨイヤー」としたのではないのでしょうか。

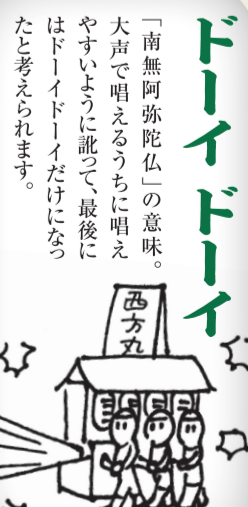
はわく

現在は「帯でく」と言いますが、中世の中央語には「はわく」とあります。17世紀初頭の『日葡辞書』にも「はわく」と書いていますので、すでにその時代にあった言葉です。元は中央語だったものが、たまたま方言として残存した一つの例です。



ズッキャンキャン

同じ肩車を意味するヒュウガンガン(長崎市)、チンガンガン(長与町)、チンドン、トクカンガン(壱岐市)、トロンキャン(大村市)など、県内には、鳴り物のオノマトベ(擬音語)から来たと思われる語のバリエーションがたくさんあります。また、カタウマ、ウマキンなど「肩」「馬」の入った語もあります。肩車を意味する方言形は全国的に多種多様ですが、ズッキャンキャンと同様に鳴り物を表すオノマトベから来た「肩車」の例は、各地に見られるようです。例えば富山県、新潟県にはカドンドン、ドデンカッカ。石川県のサイコボンボ、チャンカチャンなどは、太鼓や鐘の音が元となった名前ではないかと考えられます。



# 商館長と学者 攻防が見える 文法書



トート・ルデイ 多文化社会学部 助教

鎖国期に日本と交易関係を結んでいたオランダは、開国を境にアメリカやイギリスなどの大国に権益を奪われることを恐れ、日本語とオランダ語の言語政策を進めました。その一環として、出島のオランダ商館長だったドンケル・クルチウスが編纂しオランダで出版されたのが、日本語の文法書『日本文法試論』。海を渡ったこの文法書は、実は現地で混乱を起こしました。トート先生のお話です。

「オランダ政府は日本語を身に付けることによって、日本とのビジネスをイギリスなどに負けずに継続しようと考えました。クルチウスは日本語を頑張って習得し文法書を編纂しましたが、彼は言語学の専門家でなかったため、オランダ政府は、本当に役立つものなのかオランダに住む日本語学者のホフマンに意見を求めました。一方、彼自身も日本語の文法書の出版を準備していましたから、良い気持ちはしなかったようです。ホ

フマンは中央語を正しい日本語と捉えていました。そして、学者ではない素人が編纂した文法書だとして、下に見る思いがあったのかもしれませんが、ホフマンは大量の注釈を加えます。しかし、その中には誤りではなく単に長崎の方言だった言葉も含まれているのです。例えば、“よか・さむか”など、九州で使われる“か語尾形容詞”<sup>\*</sup>がたくさん出てきます。クルチウスがローマ字で“よかか・よかであろうか・よかではなかか”と記した部分で、ホフマンは“よか”に“ヨキ”の読み仮名を付けて、注釈では語尾の“か”を怪しんでいます」。

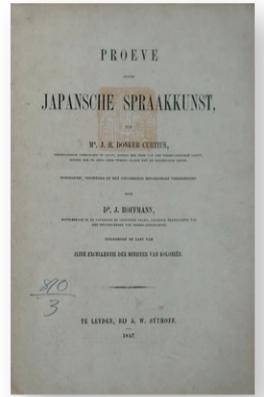
トート先生の母校であるオランダのライデン大学には、ほかにも研究対象とされていない江戸時代の日本語文典などが多数眠っているのだとか。そしてその中には、長崎の方言が含まれている可能性があります。

「当時の筆記体やローマ字を解読するのはとても難しく、そのままでは資料として使えません。活字に翻



トートルデイ先生の専門は言語学。国内外に残る貴重な文典に記された日本語の語彙や文法等を基に研究を行っています。

刻したり現代語訳を付記したり使いやすくしたものにして公開することが、私の大きな研究目標です。より多くの研究者の一助になることを目指しています」。



長崎大学附属図書館医学分館では、旧長崎医科大学法医学教室の初代教授である浅田一氏が寄贈した『日本文法試論』を所蔵。文法書の一部を抜粋した珍しい一冊です。「ホフマン教授が印刷過程で余った一部や試し刷りしたものを、かき集めて製本したのでしょうか」とトート先生。

<sup>\*</sup>か語尾形容詞 形容詞の終止形や連体形の活用語尾が「か」になることを指す。

# 海を渡った長崎弁、 地域に生きる長崎弁



野田智子 多文化社会学部 助教 <sup>\*</sup>取材時、現在は長崎国際大学に移籍されています。

多様な方言が残っていることで知られる島原半島。日本語学が専門の野田先生は、西南部の雲仙市南串山町を主なフィールドとしています。南串山町の方言には、どのような特徴があるのかお聞きしました。

「言語研究の分野では、周囲との言語差が著しい場所を“言語の島”と言うことがありますが、南串山町内でも海沿いに位置する国崎半島がこれに当てはまるでしょう。隣り合う集落の人でも、理解が難しい語

彙や文法が残っています。言語差が生じる理由には、地形や交通路の問題が考えられますが、同じ町内ですから、地域間の交流や言語の接触も行われてきたはず。それなのになぜ、言葉が均一化に向かわず変化しないのか疑問が多いですね」。

どのような方法で調査は進んでいるのでしょうか。

「話者の方々の会話を録音した音源を基に分析を行っています。例えば長崎県下広域では、“バスが来た”を“バスの来た”と言うことがありますが、南串山町の言語の島地域の方々は言いません。他にも“オロカバエ(植物の自生)”“サダチ(にわか雨)”“ウラ(わたしの一

人称)”など独特の語彙が残っています。島原半島南部には島原・天草一揆後に、幕府の命によって四国の小豆島から多くの人に移住したと言われています。このような歴史的な背景が、方言にも関係しているかもしれませんが、移住の事実が史料として残っていません。集落間の言語差を示すことはできても、四国由来の方言である可能性にまでは言及できないのが現状です」。

一方で、伝統的な方言を話す方々の高齢化が進んでいます。野田先生は続けます。

「消えゆく方言を記録することも、方言研究の重要な目的であり価値と言えるでしょう。将来、ふたたび方言を復活させる動きが出てくるかもしれません。そういった時に正しく活用できるよう、話し手の方々のアイデンティティや生活史のようなものも含めた、より良いデータを記録していきたいですね」。

伝統的な方言を  
より良い状態で  
記録する



現地調査の様子。南串山町在住の話者の方々に協力いただいています。「定期的に皆さんにお会いして、お話をするのは楽しいですよ」と野田先生。

